

図書館で感じたこと

四国災害アーカイブスに関する資料収集は、アーカイブス事務局がまず自力で収集して、その後、国、県、市町村などの皆さんに資料提供のお願いをして補うという方法で行っています。自力での資料収集の方法は図書館での収集が基本です。四国には公立の図書館が分館、図書室を含めて130以上ありますが、事務局ではこれまでにすべての図書館を訪れて情報収集を行いました。図書館で感じたことを記します。

ほとんどの図書館で良い印象を受けました。図書館に入ると、スタッフの方は「おはようございます」、「こんにちは」という言葉で出迎えてくれます。小さなまちの図書館では、こちらが土地の人間でないことはお分かりでしょうが、それでもあたたかく迎え入れ、丁寧に対応してくれます。挨拶は当たり前のことかも知れませんが、心のこもった挨拶がとても新鮮に感じられました。

図書館の中で目指すのは、郷土資料のコーナーです。ここには、市町村史、郷土史、災害記録、災害体験集、写真集など、私たちが収集したい資料が整理されています。現在発行されている市町村史や郷土史などは県立図書館でも閲覧することができますが、古い文献や地元のグループや個人が作成した資料の中には地元の図書館でなければ閲覧することができないものもありますので、すべての図書館を訪れて資料を確認する必要があります。はじめて見る資料を見つけた時には、うれしいものです。

郷土資料コーナーで地域の災害に関する資料を調べていると、災害の多い四国の中でも徳島県南部や高知県の海沿いの図書館では地震・津波に関する資料が、香川県や愛媛県の瀬戸内海沿いの図書館では干ばつ、吉野川や四万十川など河川の流域の図書館では水害、そして山間部を有するまちの図書館では土砂災害に関する資料がそれぞれ比較的多いことが分かります。また、特に愛媛県や高知県では、伊予史談会や土佐史談会に代表される、地域の歴史などを研究する史談会活動が各地で行われており、図書館を活動の拠点としている史談会の皆さんから地域の情報を教えていただくこともありました。図書館は地域の歴史や風土が蓄積された文化の拠点であることをあらためて知らされました。

郷土資料コーナーで資料収集ができるのは、図書館が地域の資料を収集したり、著者などが図書館に寄贈してくれているおかげです。図書館を利用して、郷土資料は特に大切に扱われ、活用されていることが分かります。行政や団体、個人などが資料を作成した際には、できれば一冊を地域の図書館に寄贈していただければありがたいです。そのことが地域の文化を育み、地域のことを考える人材を育成することにもつながると思います。

図書館の中には、また利用したいと思わせるような図書館づくりを演出しているところもあります。例えば、高知県の田野町立図書館では、玄関ホールに今週のテーマを掲げ、テーマに関する主要な書籍や分かりやすい解説文を展示したり、子どもの手書きカレンダーを飾るなど工夫していました。みんなの図書館です、また利用してくださいねという温かい気持ちが伝わってくるように感じました。また、県外の利用者でも貸し出し可能な図書館もあり、資料を郵送で返却すると、図書館から受領の電話をいただき、「お近くにお寄りの際はまたご利用ください」と言われました。心が伝わります。図書館での資料収集はとりあえず一巡しましたが、また各地の図書館を訪れることを楽しみにしています。